

埋蔵文化財発掘調査ニュースNo.9

なごまつおぼるみなみいせき
名護松尾原南遺跡



1999年3月

那覇市教育委員会

発行／那覇市教育委員会 〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8
編集／那覇市教育委員会文化財課 TEL (098) 853-5775
印刷／合資会社 精印堂印刷

名護松尾原南遺跡発掘調査ニュース

(1) はじめに

今回は、平成10年6月から平成11年3月にかけて発掘調査を行った「名護松尾原南遺跡」の概要について紹介します。

本遺跡の発掘調査は、地域振興整備公団（以下、公団）による那覇新都心整備事業に係るもので、那覇市教育委員会が委託を受けて実施しました。

那覇市教育委員会では、昭和63年から平成元年にかけて、地区内における埋蔵文化財の現地踏査・分布調査および試掘調査を実施しています。その結果9遺跡の存在が確認されました。その後、平成2年度から、本格的な発掘調査が始まっています。

ところで、本遺跡は、平成8年度の公団による造成工事中に発見された遺跡です。本遺跡のような新発見の遺跡などを合計すると、地区内には現在、18の遺跡が確認されています（第1図）。

(2) 地区内の遺跡分布について

地区内には、安謝川の支流である多和田川（タータガーラ）、銘苅川（メカルガーラ）、大湾川（オオワンガーラ）などの小河川がほぼ北流しています。地区内における遺跡の分

布はその小河川を中心に位置しています（第2図）。

遺跡の時期としては、縄文時代晩期に相当するものから近世にいたるまでの幅広い時代の遺跡が確認されています。その中で本遺跡を含むグスク時代前後の遺跡が多くを占めています。これらのことから那覇新都心地区は、古くから人々の営みに適した環境にあったことが窺えます。

(3) 発掘調査の概要

本遺跡は、字銘苅、小字「名護松尾原」に所在します。遺跡の名称は、その小字名からつけられました。

遺跡の層序は、Ⅰ層（戦後の米軍などによる造成土）からⅦ層（地山。遺跡の北側は島尻マージの赤土、南側ではクチャ＝粘土層）まで確認されています。その中でⅡ層とⅢ層が遺物包含層です。

発掘調査の結果、水溜め遺構・鉄跡・規則的に並ぶピット群・溝状遺構・焼土遺構など多種の遺構が検出されました（第3図）。

水溜め遺構は、長径約30m、短径約16mを測る楕円形を呈しています。深さは、最も深い所で約2mを測るようです。

鉄跡は、遺跡の北側平坦面に約50基以上確

認されています。平面形は略三角形あるいは半円形を呈し、断面は「V」字状になっています。鉄の刃の長さは、10cm前後と15cm前後のものが認められました。この鉄跡と水溜め遺構は12・13世紀頃の同じ土層で確認されており、同時期に存在した可能性が高いものです。なお、その上層（14・15世紀頃）においても鉄跡が確認されています。

ピットは、鉄跡に隣接するように遺跡の北側平坦面で約100基以上確認されました。ほぼ直線的に並んで検出されています。平面形は多角形を呈するものが多く見られました。その中の一つから、炭化した麦の種子が掘り出されています。

溝状遺構は、遺跡の南側水溜め遺構の中（第Ⅳ層上面）で二股に分かれる形のもの確認されています。その上層でも遺跡を縦横に走る溝が確認されました。

焼土遺構は、Ⅱ層中およびⅢ層上面において、4ヶ所確認されています。その範囲の中には、炭化物なども含まれていました。

遺物としては、中国産の白磁・青磁・天目・褐釉陶器、タイ産の土器、徳之島産カムイ窯須恵器、高麗系瓦、在地土器などの焼き物の他に、長崎県で産出する滑石の破片、ガラス製のビーズなど多種多様な資料が得られています。

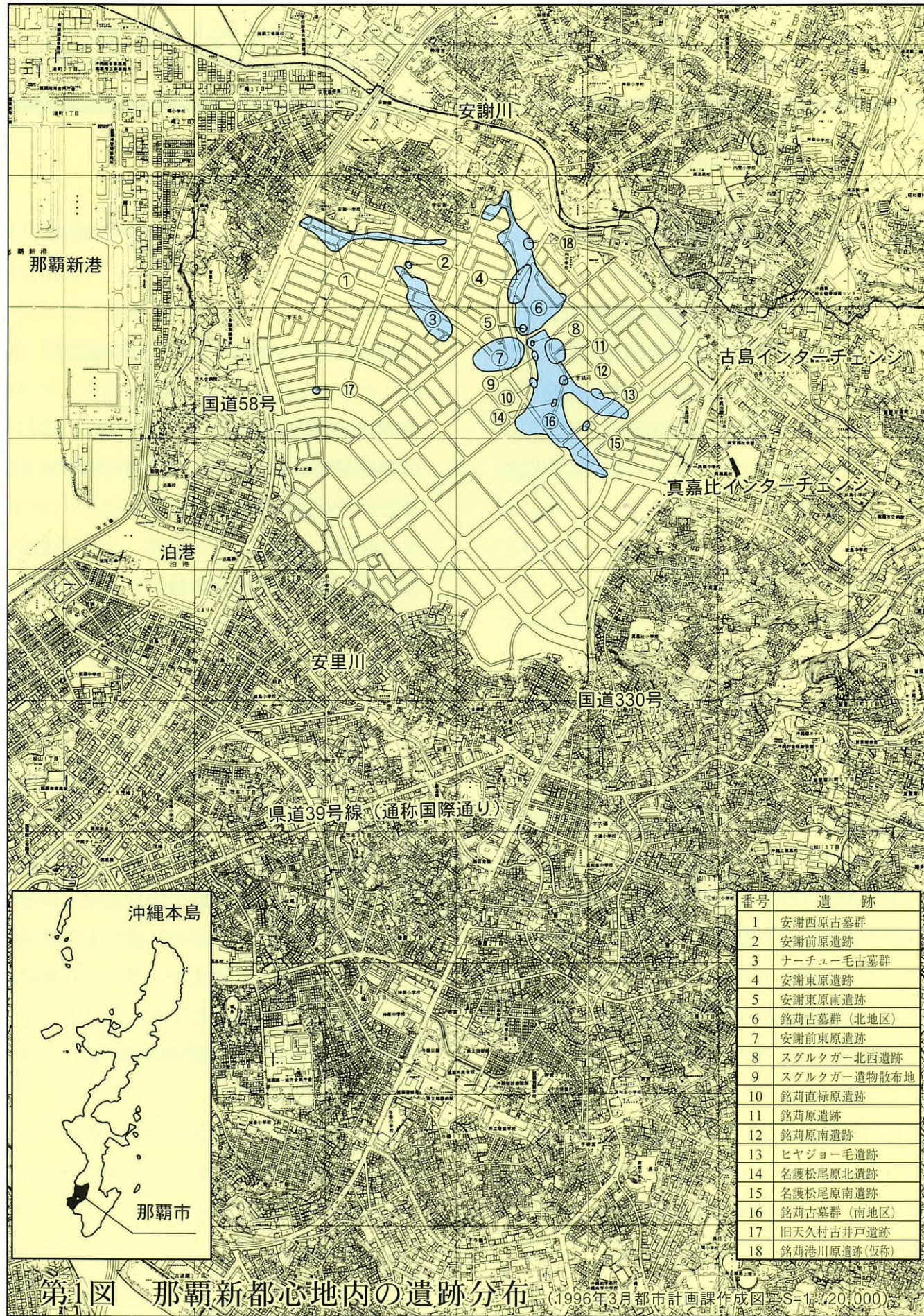
以上のように、出土遺物や層序の観察、検出された遺構の状況からすると、『名護松尾原南遺跡』は、12世紀～13世紀頃と14世紀～15世紀頃の二つの時期における生産遺跡（畑跡）と考えられました。

那覇市をはじめ県内では、生産遺跡（畑跡）の報告が幾つかあります（那覇市那崎原遺跡など）。本遺跡では、その周辺に、ほぼ同時代の集落跡（ヒヤジョー毛遺跡・銘苅原遺跡）や古墓（銘苅古墓群南B地区4号・47号墓）が立地しており、新都心地区内における河川を中心としたグスク時代の社会環境をより窺い知ることができました。

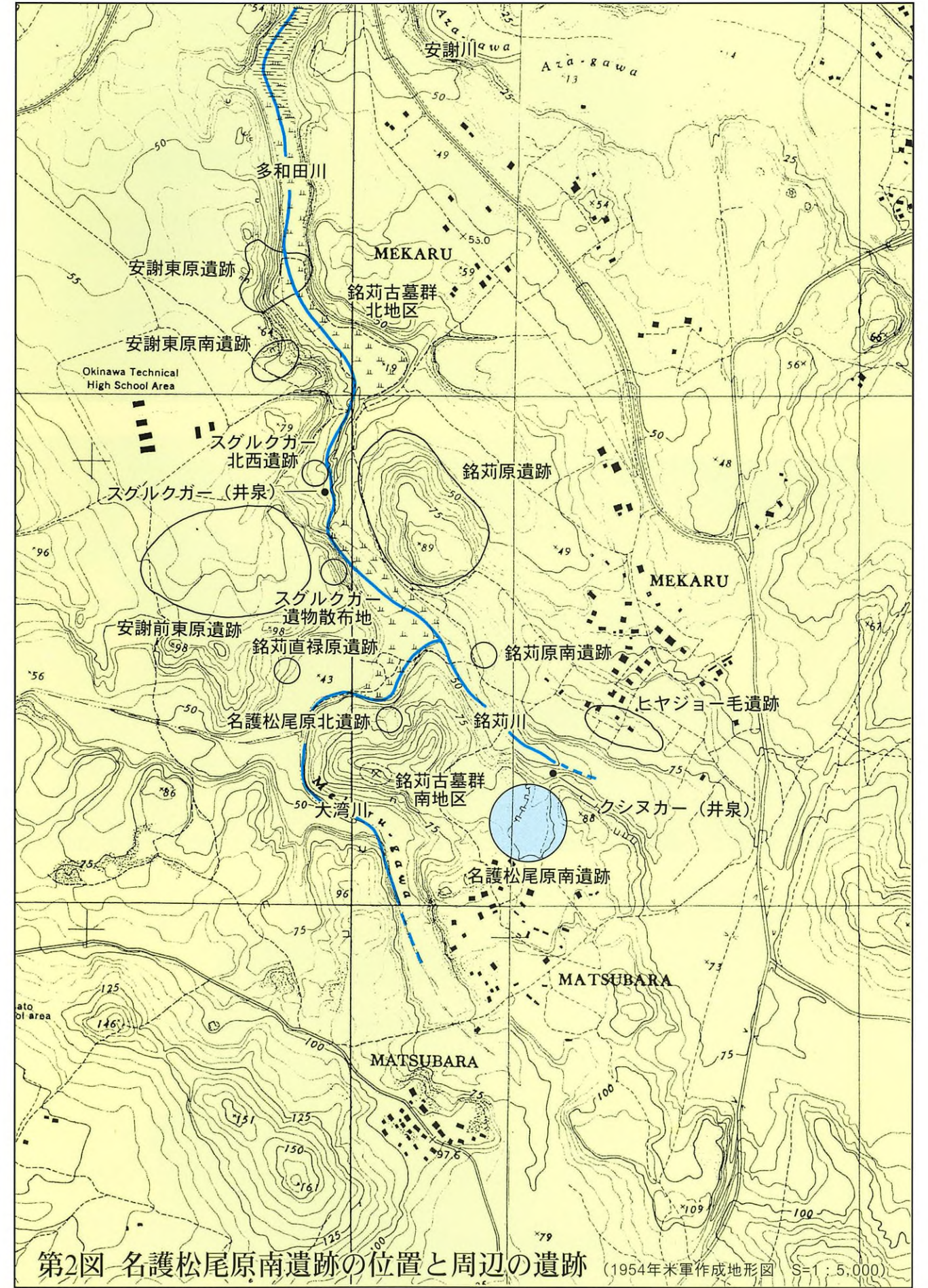
(4) おわりに

今後は、本遺跡においてどのような作物がどのような形で生産されていたかなどの検討が必要になります。調査中に炭化した麦の種子が1点得られていますが、遺跡から採取した土壌のサンプルを分析することによって、本遺跡における生産活動の内容がより具体化するものと見られます。

また、類例遺跡との比較検討を行いつつ、「名護松尾原南遺跡」の全体像を明らかにしていきたいと考えています。



第1図 那覇新都心地内の遺跡分布 (1996年3月都市計画課作成図 S=1:20,000)



第2図 名護松尾原南遺跡の位置と周辺の遺跡 (1954年米軍作成地形図 S=1:5,000)

発掘調査の開始
(北東から)
グリッド設定作業などを行なう。



実測作業の状況
(南から)
遺跡北側の土層堆積状況を
図面に描く。



発掘調査の作業状況
(南から)
夏場は、厳しい暑さの中、
テントを張っての作業。



遺構検出状況
(南東から)
14・15世紀頃と考えられ
る溝状遺構と鋤跡。

遺跡の基本層序
(西から)
水溜め遺構内のトレンチ
にて土層の堆積状況を確認する。



ピット群検出状況
(南東から)
14・15世紀頃と考えられ
るピット群。



遺跡完掘状況

(南西から)
手前に水溜め遺構の深い掘り込みが見える。中央付近の白線は溝状遺構。



遺跡完掘状況

(北東から)
手前にピット群と鋤跡、奥に水溜め遺構。



溝状遺構検出状況

(南東から)
12・13世紀頃と考えられる溝状遺構(白線の部分)。

遺構検出状況

(南東から)
12・13世紀頃と考えられる鋤跡とピット群。ピットの中から炭化した麦が1点掘り出された。



ピットの半裁状況

(東から)
全体の半分を掘り下げて遺構の掘り込まれた状況を観察する。



鋤跡の半裁状況

(南東から)
平面形は、三角形や半円形の鋤跡。断面形は「V」字状になっている。

